C－5　袖の人間工学的研究（第３報）

名古屋市立女短大　高橋春子　安城学園女短大　沢野幸子　瑞穂短大
鈴木昭子　愛知大学短大部　岡通子　日大附属大垣高校　○和田恵美子

目的　被服の人間工学的分析はすでに各方面からすすめられているが、前年にひきつづき運動時の伸縮寸法と被服パターンの関係を腕について追求した。ここでは運動時の伸縮寸法をシェルの作成により、袖丈と袖幅のゆるみについて検討した。

方法　被験者：成人女子：実験年月．1972年６月～７月．被験者の右腕に基準線を入れ腕の肘関節を中心につぎの動作別シェルを作成して平面展開し各ブロック間の伸縮状態を把握した。腕の上挙動作（前挙．側挙）３種．腕の内転、外転動作３種．それぞれにおける肘の動作の伸展．屈曲（90°．最大）である。

結果　腕の動作について、シェルの平面展開による袖のパターンから、その伸縮状態について顕著な点をあげると．長径では前腕中央線で収縮し、後腕中央線で伸長するが、その最大値は腕垂下・肘関節最大屈曲時である。周径は、上腕筋最大囲での増加が多く．腕下水平囲では最大が腕上挙180°．肘伸展時である。肘囲は腕90°側挙・肘最大屈曲時である。これらの結果はドレスパターン製図における丈の設定及び丈と幅のゆるみの関係の割り出しに活用したい。